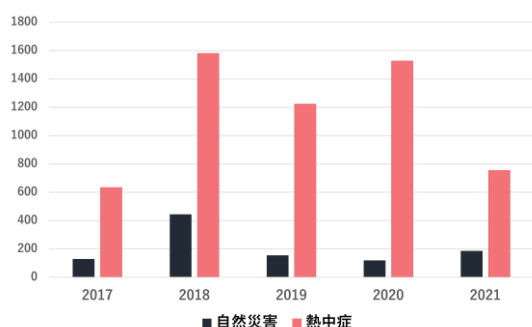


愛知県気候変動適応センターは、気候変動の緩和と適応を融合した地域づくりについて考える「気候危機対策交流フォーラム」を、愛知県地球温暖化防止活動推進センターと共催で1月23日に開催しました。

基調講演に「気候変動がもたらす未来の死者数～季節性の変化に迫る～」と題して、東京大学大学院医学系研究科の橋爪真弘教授^{はしづめまさひろ}にご講演いただきました。本号では、講演内容の一部を紹介します。

日本の熱中症救急搬送数は、2020年以降は年平均約7.5万人であり、2024年には過去最高の9.5万人以上を記録しました。また、2017年から2021年までは、熱中症により年平均1,145人が亡くなっており、これは同時期に起きた自然災害の5.5倍になります。



■ 自然災害：大雨・豪雨（土砂災害）、台風、雪害、地震、噴火等

自然災害と熱中症による死者数（2017～2021年）

（令和4年防災白書および人口動態統計より）
講師が作図 一部凡例色を変更

暑さの健康影響は、熱中症だけでなく、暑さからくる心筋梗塞^{こうそく}などの「暑熱関連死」にも注目する必要があります。2015年から2019年までの暑熱関連死者数は、合計3.3万人以上であり、熱中症による死者数の

7倍にのぼります。

2020年の東京23区の熱中症による死者について調べたところ、9割が65歳以上の高齢者であり、9割が屋内で亡くなっていました。さらに、屋内で亡くなった方のうち9割がエアコンを使用していなかったことがわかりました。

熱中症を含む暑熱関連死を防ぐには、エアコンの使用が有効です。しかし、中長期的には、エアコンを多用すると電力使用量が増加し、発電に伴う温室効果ガスの排出が地球温暖化を促進させるため、更なる暑熱関連死を引き起こす可能性があります。したがって、エアコンだけに頼らない暑熱対策を検討する必要があります。



基調講演の様子

講演後の質疑応答では、エアコン使用以外の個人でできる対策として、暑くなる前から適度な運動を行い、汗をかきやすい体をつくり、水分を取る習慣をつけることが有効であるとのお話が出ました。

環境調査センター 企画情報部
愛知県気候変動適応センター
電話 052-910-5489（ダイヤルイン）

愛知県気候変動適応センターだよりのバックナンバーはこちら
<https://www.pref.aichi.jp/site/ailccac/tekiou-dayori.html>

